
崩壊

みえさん。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

崩壊

【Nコード】

N0811S

【作者名】

みえさん。

【あらすじ】

「ロシア作戦」と呼ばれるテロで生き延びた男は、けじめを付けるために日本のある男を訪ねる。

ガタガタと揺れる電車の中で男は静かに目を閉じていた。

銀色の髪を持つ男の左目は眼帯に覆われている。その端からは古い傷跡が覗いていた。無駄な筋肉の全く付いていない男の身体はタイトなニットのセーターを着ると細く頼りないようにも見えた。

右手にはめた少し錆びた腕時計を撫で、外の景色を眺めた。

日本に来るのはいつくらいになるだろうか。

あの時は風景を眺めている余裕はなかった。

時間的にも、精神的にも。

ひやり、と冷たいものが頬に触れた。

ロハは顔を上げる。

「緑茶と紅茶、どっちにします？」

洋一は手に持ったペットボトルを上げて南部訛りの英語で問いかけた。

トイレに行くと少し席を離れていたが、どうやら先刻の駅で飲み物を買ってきたらしい。

彼は仲間内では「バタフライ」と呼ばれるナイフ使いの少年だった。実際は少年と呼ばれるような年齢ではないが、彼自身子供扱いをされることに抵抗が無いようだった。彼を拾ったガイなどは未だに彼のことを「少年」と呼ぶくらいだ。

日本人はとかく幼く見られやすいが、洋一は実年齢よりも随分と年下に見える。出会った頃よりも幼く見られるのではないだろうか。北欧の血の混じったような外見は日本人にしては彫りが深いという印象を受けるが、実際日本の中にとさして気にする程ではないことが分かる。

女の子から言わせれば「外国人っぽくて少し格好良い男の子」と言ったところだろうか。

東京では彼は見知らぬ女性に声をかけられていた。ロハも何か話

しかけられはしたが、何を言っているのかよく聞き取れなかった。
日本語は苦手だった。

「紅茶の方を」

ニヤニヤと何かを企んでいるかのように洋一は笑う。

「味覚が崩壊しますよ」

「？」

ロハは訳が分からず首を傾げた。

洋一はペットボトルをロハに渡すと向かい側の席に座った。

東京の方とこの辺りでは電車の内装も少し違う。田舎の方が人はゆったりとしていて乗客の乗り降りする回数もずっと少ない。

今この車両内にはロハ達も含めて四組の客しかいなかった。

「もうすぐですね」

洋一は少し気遣うような視線でロハを見つめた。

ロハは磨かれた窓ガラスに映った自分の顔を見つめながら頷いた。
彼の左目を覆っている眼帯は普段の革の眼帯ではなく洋一が日本に来てすぐに買った白いものだ。どうして付け替えるのかと問うと、
洋一は目立ちすぎるのだと答えた。

ただでさえロハのような銀髪で長身の外人は日本では目立つ。眼帯如きで今更だと思っていたが、田舎町の方に来るとその理由が少し分かった気がした。異質と異常は似ていて違うものなのだ。

かり、と小さな音を立ててペットボトルの蓋が開けられた。

向かい側の席で洋一がお茶を飲む姿がガラスに映り込んだ。

手に握った冷たいペットボトルは気持ちよかったが、今はどうしても飲む気にはなれなかった。

その街は都会と言うには人が少なく、田舎と呼ぶにはにぎわっている街だった。

まだ他人に無関心になりきれていない日本人達が「外国人」である二人を見て興味をそそられたかのように視線を送ってきた。ただ

ロハと視線がかり合うとまるで話しかけられるのを恐れるかのよう
にすぐに視線を逸らした。

「あれのようです」

洋一は片手に握った地図を見ながら言う。

彼の示す先には少し古びた集合住宅があった。土地の狭い日本に
はホテルのように狭い部屋が集合した住宅があるのだと洋一は説明
した。

そしてその一室に、林田がいます。

古びた階段を上がり、二階の隅の部屋のドアを叩く。

ドアベルのようなものは付いていない。

ややあってドアの向こう側から警戒したような声が聞こえた。

「誰だ？」

林田のものだった。

日本語で不機嫌そうな男のもの。

それには洋一が答えた。

「久住洋一です」

「……知らない」

「当然です、お会いしたことはありませんから」

「……」

「大陸の人間、そう言えば分かって来ましたけど？」

洋一が何を喋っているのかは何となく分かった。ロハは黙って彼
らの会話を見守った。ここは日本語の分かる洋一に任せた方が無難
だろう。林田は英語が出来ないわけではないが、ロハの日本語と同
じくらいに酷いものだった。二人が顔を合わせたとしても、洋一無
しではまともに会話も成り立たないのだ。

やがてドアが開かれた。

洋一は素早く足を隙間にねじ込み、ドアチェーンをナイフで跳ね
上げた。

乾いた金属音とともに、チェーンがはじき飛ばされる。

「てめえ、何をしやが……」

洋一の強行に声を荒げる林田の瞳が、洋一の後ろにいる男を認めて見開かれた。

それはまるで死神でも見たような目つきだった。

「……ロハ」

「……」

ロハは静かに林田を見下ろした。

洋一よりは背が高いが、林田の背は低い。中年も過ぎようとして
いる男の顔は白髪 of 混じったヒゲが生え、目は落ち窪んで卑屈そう
な色が浮かんでいる。着ているものは薄汚く饅えたような臭いがし
た。

彼の知る林田はもっと颯爽とした男だった。

どこか狡猾そうな顔立ちはある頃のままだが、全てに疲れ投げや
りになっている風にも見えた。あの戦場で誰よりも頼りになった男
が今は麻薬の密売やパスポートの偽造などの裏稼業をしていると聞
いて俄には信じられなかったが、この様子であるとどうやら本当の
事だ。

これがあの林田なのかと思わず目を背けたくなった。

「俺を殺しに来たのか？」

林田は英語で言った。

相変わらず酷い発音だった。

にこにこ笑いながら洋一は日本語で答える。

「殺すなんてとんでもない。僕らはあなたに死んでもらいに来たん
です」

「坊主、てめえ新しいメンバーか？」

林田は不審そうに洋一を睨んだ。

「お前、自分がどんな世界に踏みこんだのかわかってんのか？」
もちろん、と彼は頷く。

ロハは黙って二人の会話を見守った。

「多分、あなたが僕ぐらいの時よりもずっと理解していると思いま
すよ。僕は、あなたやロハさんのように、血に懂れたことなんて一

度もないんですからね」

「……てめえの正義が正しいとでも？」

「そんなことは思っていないません。リーダーの理想に共感している訳でもありません」

「なら何でそんな仕事をする？」

「昔のあなたなら理解できたかもしれませんがね。でもあなたはもうダメです。生きることすら死ぬことも諦めてしまっている」

彼の言葉に林田は眉間に皺を寄せた。

不可解と言うよりは不快そうな表情だ。日本人の血が流れる二人だが、対照的に見えた。若さや外面の事ではない。探すことに迷わない洋一と、諦めた事に迷っている林田。

林田を見つめる洋一の瞳は少し失望したような顔つきでもあった。洋一は振り返り、英語で問う。

「ロハさん、あなたから伝えますか？」

ロハは頷き、事前に洋一に教わった片言の日本語で林田に言った。ゆっくりと、言葉の意味を噛みしめさせるように。

「お嬢様の、左足は、動きません」

林田が、驚いたように目を見開いた。

「……リーダーは生きているのか？」

ロハは英語で答える。平静を装ったが声音には憎悪が混じった。

「あなたがリーダーと呼べる人ではありません。あなたが一番良く分かっているはずですよ」

「……」

最後は、と英語で言いかけて、日本語に直した。

「最後は、自分で決めると良いでしょう。これはお嬢様の意向です」

ロハは錆びた腕時計を外し林田の目の前に差し出す。

迷ったように林田は手を差し出した。

「……お前、こんなものをまだ持っていたのか」

長い間それはロハのお守りだった。

レイアと出会うよりもずっと昔、まだロハが別の名を名乗り少年

兵として駆けていた頃、敵の傭兵隊にいた彼はそれを箱に詰めて送ってきた。音と火薬の匂いで時限装置と勘違いをした少年兵達は怯え、本来やるべきことへの対応が遅れた。結果、彼らの作戦は失敗したものの、敵味方共に最小限の被害だけで終わったのだ。

侮辱されたようで酷く憎んだこともあった。けれど、その腕時計は捨てられなかった。右も左も分からず命令されるままに動く少年にとって、林田の行動が何を意味するのか分からなかったのだが、それでも何かを感じていたのだ。

後にそれはロハにとっての指標となっていた。

味方として再会し、変わらない彼を見て嬉しくもなった。

だが、もう、彼は目標にはならない。

「……お返しします」

「……」

くるり、とロハは踵を返す。

後ろで洋一が林田に何か挨拶のような言葉を告げ、彼を追いかけしてきた。古い階段を降り、集合住宅を後にした。

少し人通りのある道に出た時、がらり、とどこかで窓の開く音が聞こえた。

おい、と叫ぶような声が聞こえ、ロハは立ち止まる。

洋一だけが後ろを振り返った。

何か水が激しく出るような音。

きゃあ、と女性の悲鳴が響く。

何か重たいものが地面に落ちるような鈍い音が聞こえた。

人々がざわつき慌てたようにロハ達の横を通り抜けていった。雑踏の中から、救急車という単語と警察という単語が響く。

ロハは目を閉じる。

振り向く必要はない。

見る必要はない。

どうなっているか、最初から分かっていたことだ。

（喉が痛い）

電車の中で洋一に渡された紅茶を思い出し、ペットボトルの蓋を開ける。かり、と小さい音が聞こえ開いた口から赤い液体が見えた。紅茶とは名ばかりの人工的な液体が喉元を通過していった。

洋一の言った「味覚が崩壊する」の意味がようやく分かった。

「……甘いですね」

日本語で呟いた。

洋一はくすりと笑い声を漏らした。

後方で起こったことを見ていたはずだったが、何事も無かったかのように明るい声だった。

「それ、日本で一番売れている紅茶飲料なんですよ」

「……今は、その理由が少しだけ分かる気がします」

そう言って彼は甘い紅茶に再び口を付けた。

手の熱でぬるくなった普段であれば飲むことも躊躇われるようなもの。

極限では泥水すら飲める精神を持った口ハだったが、これを好んで飲むとは思わない。ただ、それすらもどこか心地よく感じる。

それは不自然に付けられた甘さの為なのだと言ハは理解した。

秋のぬるい風が紅茶の匂いをどこかに運んで消えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0811s/>

崩壊

2011年3月31日15時10分発行